九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

浮世草子と教訓 ： 其磧の気質物・町人物と『当世誰が身の上』

倉員，正江

https://doi.org/10.15017/4741882

出版情報：雅俗. 5, pp.10-13, 1998-01-10. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

浮世草子と教訓

――其磧の気質物・町人物と『当世誰が身の上』――

倉員正江

一　気質物の教訓性

浄土宗の談義僧静観坊好阿は、『当世下手談義』（宝暦二年刊）序で、益軒教訓書と其磧の気質物を併称し、「大惣蔵書目録」を繙けば、第十五冊に、「西鶴」「艶（好色本）」、「八文字屋（主に長編時代物）」、別に「浮世教訓」なる名称で、「気質物」と町人物系統の浮世草子が掲載される。目録は明治期の作成だが、江戸時代のニーズを反映していよう。この「浮世教訓」中に、涼花堂斧磨作『当世誰が身の上』（宝永七年正月刊・正徳五年正月再印／大本六巻六冊）が含まれる。序文に言う如く、山岡元隣の仮名草子『他我身の上』（明暦三年刊）を意識した、西鶴町人物風の出世・没落譚である。

二　『世間子息気質』と『当世誰が身の上』

其磧名を明記し、自作の旨を強調した『世間子息気質』（正徳五年秋自序刊）は、気質物の嚆矢として文学史上に名を残す。序文は明かに『本朝二十不孝』を意識し、西鶴剽窃の大部分が『二十不孝』『日本永代蔵』に出ること（長谷川強氏『浮世草子の研究』第二章第四節）や、益軒教訓書等の影響が従来指摘されている（堤邦彦氏「『世間子息気質』成立の背景」『芸文研究』43）。これを否定すべくもないが、本書の成立に直接の影響を与えた作として、前掲『誰が身の上』を検討したい。外題添書きに「身は末代の品鏡」とあり、巻末に「風流（ふうりう）世の人心」（六冊）を予告、これは未刊と思しい。西鶴亜流の

好色物に手を染めた俳諧師は少なくなかったが、大坂住の雑俳点者山本斧麿は、町人物系を継承しようと試み、教訓的言辞を多用する。当時好評であったと見え、『子息気質』刊行年に再印されていることも、其磧を刺激した可能性が強い。以下具体的に影響関係を指摘する。

『子息気質』冒頭章「木賊売は心を磨正直な百姓形気」は、子供のいない木賊売に、産宮の小坊主が今時の子育ての様相を説くが、明かに『誰が身の上』巻一の三「上〻吉箱入の銀持」冒頭箇所による。息子の教育に甘い父を描写した箇所を比較する（以下上段其磧作、下段『誰が身の上』の引用、濁点適宜補う）。

其親の叔父たる人見かねて。尤そなたの子は発明なとはいひながら。むかしから走る馬にも鞭といへば。ちと折〳〵は行義をなをされよと身の中とて心をつくるに。皆迄仰られな。惣じておさなひ時に躾をおしゆれば入目に成て病づき。虫など出て後〻迄の煩ひとなれば。幼少の時は息災なを勝にして。ありたきまゝにそだて骨身もかたまり。物の心もわきまへる時分より。万の事をおしゆればよくがてんし。異見もよくきゝ入る物なりと。それなりけりにそだてあげて。後には持あまして勘当する事是皆親のとがぞかし。木竹をつくるにも若き内よりそろ〳〵揉つくれば思ふごとくなれり。ひねて後ためんとすれば枝おれ枯しぼむがごとし。又其子成人しておのれとはづかしき事をしり。悪曲をなをさんとすれば物うく。元気をへらし或は窮屈にて癆

去智者のいへる我あたりの童の不行義なるに折檻をもせざる親の心を尋ねければ。幼少の時に礼をおしゆれば只ありたきまゝに育。骨身もかたまりて異見をくはふべしと思へり。以ての外の不覚悟なり。それ人の子は胎教とて腹にやどるよりあしき物くはず。悪敷事見ず聞ず。起居までよく謹時は姿美しく。才智人にすぐるゝとの教なり。

木竹を作るにも若き内よりそろ〳〵揉付れば。思ふごとく成り。ひねて後ためんとすれば枝をれ枯しぼむがごとし。又其子成人して己と恥かしき事をしり悪しき曲をなをさんとすれば物浮元気をへらし或は窮屈にて癆瘵と成事女子は勿論なり。

瘵となり。親よりさきだち父母一生の思ひとなれり。又おのれと発起もせず異見をももちいざる時は。親は怒子は恨みたがひに憤り悪人となつて。家をうしなひ身をほろぼす人おほし。およそ世界のあく人親のしわざならずして。誰がわざといふべき。

亦己と発起もせず。異見をも用ひざるときは親は怒子は恨み。互ひに憤り悪人と成て命をしゞめ身を亡ぼし終に楽しき心なく相果るぞかし。凡世界の悪人親の仕わざならずして誰かわざとかいふべき

其磧は後に『善悪身持扇』（三巻三冊／享保十五年刊・明和二年『万福富貴自在』と改題刊行）中巻一「雀百になれど躍忘れぬ」にも同一箇所を利用しており、こちらは「胎教」に言及するなど、より『誰が身の上』の本文に近い。本書は其磧の座右の書であり続けた。

また『子息気質』最終章「福人になる世倅が身の上知ぬ占形気」も、『誰が身の上』巻四の二「足事を知る裸長者」に拠る表現が見られる。

其身善果なくしてはいかほ一但シかくいへばとて貧者がどねがひいのりても。貧者が俄に福者にはならぬものなり。貧福は天地の道具にて。駕籠に乗る福者あつて。是を舁貧者なくては世界は立がたし。硯になる石あれば火打になる石もあり。いづれも石の役はつとむるぞかし。人もそのごとく銘〻の役をつとめ死するが人なり。

福者になるには不非貧福は天地の道具にて。駕籠に乗る貴人有て。是を舁賤者なくては。世界は立難し硯に成ル石もあり火打に成石もあり何れも石の役は勤る也人も其ごとく銘〻の役を勤め死するが人なり。富るをうらやみ。我わざに飽果疎略なるは役にたゝずといふなり。

其磧は後に町人物『商人家職訓』（外題『家職訓』五巻五冊／享保七年刊）巻四の二「手代が力でねぢ直した旦那の身代」冒頭にも、同一箇所を利用する。

三　『家職訓』の教訓

『家職訓』は、其磧の浮世草子には珍しい半紙本形で、益軒や西川如見の教訓書の盛行を意識している（『八文字屋本全集』8拙稿解題参照）。巻三の一「手代が減す

私金鍛冶屋が延す細工の銀」も『誰が身の上』巻二の二「袋を通す難波の芦錐」による。

商売は草の種何をか上りとし何をか下りとせん阿膠を用ひて墨をねり毛をねぶつて筆を造りていづれも貴人の御手にふれらるゝ呉服物蚕糞なり両替の金銀何者の手より出けん薬やに人支阿膠童便製の薬あり凡木を削て箱とし鉄をきたいて剣とす是等は清浄の業なり剣は何ぞ鍛冶の職なり容を荘らざれば賤しき業のやうに思ひてうぬが子のつとむる両替を自慢して人の子の鍛冶屋に居るをそしれるは慮外千万むかしより知行官位を給はる鍛冶は多く取込して倒れ手鉄うたるゝ両替は世

商売は草の種何をか上りとし何をか下りとせん只少の道理を以て位を分るのみならん。阿膠を用ひて墨をねり毛を用て筆を作りて何れも貴人の御手にふれらる呉服物かいこの糞也両替の金銀何者の手より出けん薬屋に人支あり。凡木をけづりて箱とし鉄をきたひて剣とす。此等は清浄の業なり。殊に太平の御代をあがめて剣を箱に納むといへり。剣はなんぞや鍛冶の職也箱はなんぞや指物屋の工なり容を荘らざれば賤敷業のやうに思ひて宜しからぬ世渡する身より人がいへばとて。

にありたゞ人は身の端正を磨かんより心のきらを磨べし…（中略）…主取の善悪を吟味し家職の撰嫌ひする手間でをのが子の性を見すへ躾が心太く大胆なるむまれつきならばきびしく折檻してずいぶんたゞゐせぬいそがしき商売屋の強親方につとめさすべし

箱屋の二ざう鍛冶の三ざうなどゝいへるは慮外千万の事なり此心より弟子奉公に出す親。家業を撰嫌ひする事多し。知行官位を給る鍛冶は多く側れて。手錠打たれぬ両替は無数事を見ざる成べし只身の端正を磨かんより心のきらを磨べし。

『誰が身の上』は、其磧作品の構想自体に影響を与えた箇所もあるが、紙数の都合で省略する。

総じて「浮世教訓」型の浮世草子は、改題本も含めて刷りを重ねていることは注目すべきである。『誰が身の上』も無刊記後印本の他、『人間一生盛衰記一名誰が身の上』（外題）と改題され、弘化三年・嘉永三年に刊行された。見返に「八文字屋自笑作」とあるのは皮肉であるが、幕末まで命脈を保った事実を見直してよかろう。